史料翻刻

木下韡村日記（三）

島　善高

〔上表紙　別筆〕

一八四一　天保十二年十一月一日より
一八四二　同十三年三月十九日まで
日記
木下宇太郎
三

〔中表紙　自筆〕

三番
天保十二年丑十一月朔日ゟ
同十三年寅三月十九日迄
日記
木下宇太郎

十一月朔日　晴
腫物ニて引入

二日　晴
一、惣御登城ニ付
嗣君御登城　被為遊候、右ニ付例日之御詩会御見合ニ相成候事、
引入前日同様

三日　晴
一、平野三郎兵衛、堀内久左衛門休息相済、東着
一、引入同断

註
① 堀内久左衛門…二百石、御郡代当分。（『熊本藩侍帳集成』、五七

九頁）

四日　晴

一、引入同断

五日　晴

一、引入同断

六日　晴

一、今日〻腫物快相成候ニ付、出勤達仕候

一、講釈例之通、禹貢相済申候

一、御夜讀三國志例之通被遊、其跡ニ而関ケ原合戦之大略申上候様被仰付候ニ付、荒増申上候

註

① 禹貢…「書経」夏書の一篇。

七日　小雪、雨

一、御会孟子、宇太郎引入中、告子首篇、杞柳、湍水二章ハ御近習〻被上被為済、今日ハ食色性也之章〻孟季子問之章迄上ケ申候

一、芳澤金吾嫡子弥門儀、永々相煩居昨晩死去仕候段知せ参候ニ付、今日吊儀ニ罷越申候

一、長沼十郎助、国友式右衛門休息前ニ付、為離杯高田〔十兵衛〕、入江〔傳右衛門〕、村上、吉村〔直助〕、渡部列、高輪萬清楼江参候、御夜讀ニ付先ニ引取申候

一、御夜会、蒙求被為済候跡ニ而、伊達太膳太夫様御所望ニ付、御書被進候ニ付、御下地御認被遊候を拝見被　仰付、君子之交淡若水と被遊、語柄至而御相應之段申上候

一、今日橋口彦助江書状取遣仕候、桂山様来ル十七日御發棺之様子ニ申越候

註

① 桂山様…島津斉宣（一七七三～一八四一）。江戸時代後期の薩摩藩主。幼名虎寿丸、のち又三郎。諱は忠堯、のち斉宣。官位歴は豊後守・薩摩守、中将・修理大夫、正四位上。斉宣は隠居して渓山と号した。天保十二年（一八四一）十月十三日没す。法名、大慈院殿舜翁渓山大居士。（『国史大辞典』）

八日　晴

一、御會、公都子問性之章被相済候

一、今晩御夜讀之處、明暁七ツ半時御供揃ニ而龍ノ口江被遊　御出候ニ付、御休讀

九日　晴、夜雨

一、今日

若殿様於龍口御屋敷

御前髪被遊　御取候、右ニ付御酒肴頂戴、御用人江謁、御歓申上、夜分被為有

御帰座候節、並居ニ罷出候、田代雄次郎一同詩を差上申候事

十日　晴

一、昨九日御飛脚着、家書平安、北野際左衛門状来、留守ゟ上下地壱反送り来候

一、今日冬至

一、御會、豊年子弟多頼之章被為済候

一、御夜讀ニ罷出候處、

御所様江被為上候ニ付、御延引被仰出候

一、明十一日、中村健助、長沼十郎助、国友式右衛門出立ニ付、暇乞ニ参候

註

① 中村健助…御近習支配頭之支配、百五十石。（『熊本藩侍帳集成』、四三一頁）

② 長沼十郎助…朽木内匠組、高百石之御擬作。（『熊本藩侍帳集成』、四三七頁）

③ 国友式右衛門…須佐美権之允組、百石、御留守居御番方。（『熊本藩侍帳集成』、五八三頁）

十一日　晴

一、御會、牛山之章被為済候

一、御會後ゟ門員〔門岡〕左衛門同道、鮫洲江参り、高田、村上、上村列出會、夜分罷帰候事

註

① 鮫洲…東京都品川区東部の旧地名。現在の南品川・東大井にまたがる。かつては砂浜の海岸で、茶屋があった。

十二日　晴

一、御灸治被遊候ニ付、孟子御休会

一、御詩會並之通、至日訪友人山荘、騎過羽田二題差上申候、四首被為在御作候

一、御夜讀例之通、跡ニ而被遊御書候、下り懸門岡員左衛門御小屋江村上同道、参候

十三日　晴

太守様當御屋敷江被為入候ニ付、御夜会不被遊候

一、薩摩老侯御死去、来ル十七日御發棺之由、彦助〔嬌口〕も御供仕候由ニ付、今日暇乞ニ相尋申候

註

① 薩摩老侯…島津斉宣。前掲、桂山。

十四日　晴

一、孟子御会、無或乎王之不智章被為済候

一、昨十三日御飛脚被差立候ニ付平安を報、山田守敬江尺牘小冊二部仕出、太城〔ママ〕太郎衛門、荻角兵衛、北野際左〔ママ〕衛門返事、津村宮門返事、城野弥三郎返事、皆々仕出候

註

① 太城太郎衛門…大城太郎（良）右衛門か。百石。（『熊本藩侍帳集成』、五五〇頁）

十五日　晴

嗣君　御登城、　西丸江も御登営御下り、龍ノ口江被為入候

一、三浦九郎兵衛ゟ夜分紐解之案内有之候ニ付、深更迄参申候

註

① 三浦九郎兵衛…有吉清九郎組、百石。（『熊本藩侍帳集成』、四三九頁）

十六日　晴

一、講釈並之通、甘誓一篇相仕舞、跡ニ而礼冠義を少々申上候

一、御夜讀並之通被遊候

十七日　晴

一、文會ニ付奉願、朝ノ内ゟ安井仲平ニ参り、塩谷甲蔵、山□〔地カ〕何某、上村彦次郎、税田正蔵、竹居清記、田中亮蔵、出會之内尾藤高蔵殿、中西何某参り、松本頼蔵墓石料相談之由、其跡ニ被揃深更迄、及對酌、夜九ツ半過御屋敷江罷帰候處、帰り次第出方仕候様組脇中ゟ申来、右ニ付清成方江参候處、明朝ニ而宜敷段被申聞、引取申候

文會　次席手前受持

送塩谷甲蔵駕扈之晃山序

原毀　弧矢之利以威天下

讀老子

今日文会ニ趙普論一篇結撰仕候

註

① 竹居清記…武居清記（用拙、一八一六～一八九二）。漢学者、奨匡社の命名者。木曽山村領の儒臣武居敬斎の長男。名は彪、字は文甫、通称清記のち拙蔵、用拙と号した。天保七年（一八三六）江戸に出て昌平黌で古賀侗庵、また松崎慊堂塾で学び、同十三年帰領して青莪館助教として学頭の父を助け、朱子学者ながら経義のほか実学を説き、洋学にも関心を示した。また詩社攻玉社の盟主となった。（赤羽篤他編『長野県歴史人物大辞典』郷土出版社、一九八九年）

② 尾藤高蔵…尾藤水竹（一八〇〇～一八五五）。江戸時代後期の儒者。寛政一二年生まれ。尾藤二洲の長男。伊予の人。嘉永三年（一八五〇）浦賀奉行浅野長祚配下となる。安政元年十二月十四日没す。享年五十五。名は積高。字は希大。通称は高蔵。別号に弦庵。（『日本人名大辞典』）

十八日　晴

朝之内野村〔傳左衛門〕方ゟ紙面参候ニ付罷越候處、若殿様林家御入門、来ル廿七八日之中、日取可然候間、先員長江打合、内輪取結候様との事ニ付、御式書持参仕度と申出候ヘハ、先今日ハ見合候様夕方噂ニ成申候

一、臨時、孟子御會被遊、魚我所欲之章半迄被為済候、今晩ハ御所様被為有　御上候ニ付、御夜讀ハ不被遊旨被　仰出候

十九日　晴

一、今日

太父君七年御忌辰ニ付、夕方ゟ片岡忠左衛門、明石常次、門岡員左衛門を招、茶を點申候

中島朝之助久敷風邪之處、腫氣強危篤之由、本田猪作申ニ付、夜分見舞候、かくけ之仕出と被存候

廿日　雪深二寸

一、今日武藝

高覧ニ付御休會之處、夕方村上久太郎江被　仰付候、前章終迄

一、朝飯後、野村傳左衛門方江罷越候處、清成八十郎方江被参、右ニ付彼方江罷越、同席ニ而林家内懸合之儀、御式帳未タ出来不致候ハ、先跡ニ致、表立之御使者且御日取之内聞共二稜迄取結候而ハ如何可有御坐哉相伺候處、今日参候様清成方被申聞候ニ付、直ニ罷越、川田八之助江相談仕、御日取ハ来ル廿八日昼後、其已前之表立而被

仰入之御使者ハ廿三日朝之内と相極申候、序ニ龍口御屋敷江罷越、清原小左衛門、高橋弥四郎を尋、夜五ツ前罷帰申候

廿一日　晴

一、今日　御覧ニ付御休會

一、朝飯後清成方江罷越候處、辛川〔孫之丞〕方被参、右内話之砌ニ付野村方江可申段被申聞候ニ付罷越、昨日八之助相談之趣具ニ書認差出申候

一、村上久太郎方江参、閑話仕候、夕方今井直衛参り、武雄今日元服仕候ニ付案内仕度由ニ付罷越、夜分野村方、〔七左衛門〕松野方、〔三右衛門〕船津方江醉訪仕候

廿二日　晴

一、御城　御婚儀被為調候ニ付、

嗣君被遊　御登城、今日御詩會共ニ御延引被　仰出候

一、野村方江参り、明日林家江之御使者、御當日御束修金数其外存付之儀、及茶話申候

一、夕方高田方江参り、佐久間〔角助〕、船津、村上、新美〔一左衛門〕相見へ居申候、夜分新美来話

廿三日　晴

一、妙解院

御参拝被為有候

一、村上久太郎江参り、其後高田、村上、相見へ申候、猪を屠申候

一、今日雇御差立ニ付平安を報、尤先月末之飛脚昨日着、尊書も致〔ママ〕来、家書も平安、東良助留守ニ参候由ニ而、書状も指越、同人儀六月廿八日隅川被遊、留守ニ噂仕候由ニ而、様子承度申越候ニ付、荒増今日之便ニ申送り候

一、御夜會被遊候

廿四日　晴

一、朝之内清成方被呼候ニ付参候處、林公御出之節下供等御取扱之儀、飯料ニ而御士以上不都合ニハ無之哉、且追々御出ニ付而聞合之取遣等之為外ニ入門ニ而も可致都合ニ候哉、承合候様被申聞候ニ付罷越、〔川田〕八之助江懸合候處、供頭外一人都合二人待分ニ而、外

ニ歩弐人、飯料壱朱宛、其外下供迄十五人計、百文宛長州様之御見合料ニて不都合ニ無之段、且又追々御出ニ付而ハ宇太郎ゟ直ニ彼方御用人江懸合不苦候得共、壱人ニ而ハ手足不申儀も可有御坐、御側向之人為懸合彼方御用人ニ逢分居候而も可宜、彼方ニ而於而ハ何レニも支不申由、且又御入門之日、御間ニ儒者出候事、是亦藩法次第ニ而、たとへ出不申とも於彼方様少シも支不申段申聞候ニ付、右之趣ども罷帰、委細清成方江噂仕候

一、朝御會、求放心之章を求事ニ付御枝折之事申上候へハ、今日ゟ御會本ニ　御枝折ハ不被為用候

一、林家ゟ帰途を迂、池邊和門病氣を尋、名和桂之助を尋、引取申候

註

① 林公…九代大学頭林檉宇（一七九二～一八四六）。林述斎の第三子。佐藤一斎や松崎慊堂らと学問的交流があった。天保九年致仕した父述斎の跡を継いで大学頭となり徳川家斉及び家慶の侍講となった。その後小姓組番頭につき二千俵給与となる。天保十二年述斎の死によって家秩を継いだ。弘化三年十二月六日没す。享年五五。（『江戸文人辞典』）

② 長州様…毛利敬親（一八一九～七一）。幕末・維新期の長州藩主。文政二年二月十日十一代藩主毛利斉元の長子として生まれる。幼名は猷之進。十二代藩主斉広の養子となり、名を敬親とし、天保八年四月家督をついだ。同六月、従四位下、侍従・大膳大夫に叙任され、将軍徳川家慶より偏諱を与えられて、慶親と改めた。同九年就封。明治四年三月二十八日没す。（『国史大辞典』）

廿五日　晴、風

御城　御能、

嗣君　御登　城被為有候

廿六日　晴

一、講釈例之通被仰付、五子之歌其百迄上申候

一、御夜讀之處、

御所様江被為上候ニ付、御休被　仰出候

一、清成方被呼候而林家江差出候御式御調書被相渡、且裏玄關之儀、當時中御屋敷ニ付一切裏を御用ニ相成候訳を以、内々相断置候様被申聞候

廿七日

一、四ツ前ゟ林家江罷越、八之助并山山隼太江對面、内意申達、明日弥以御出可有御坐ニ決申候

一、去ル廿五日、一齋先生　公義江被召出、聖堂附御儒者依田源太左衛門様跡被仰付候

一、御夜會之處、明日林家御入門ニ付、如来先生、樺島勇七江被遣候手紙、嚶鳴館遺学ニ載居候を、御讀被遊度、清成方噂ニ付、御會之代りニ是を上ケ申候

廿八日　暮方大雪

一、朝四ツ過林家御出ニ付、表御廣間江相伺、御使者御用人御附

役、今日御目通り之名前差出、無體、若殿様御案内ニ而、御居間江御通りニ付、次々相扣御儀式被為済候而ハ直ニ御引取ニ付御送りニも出不申候、九ツ比首尾能御手数等被為済候

一、八ツ後臨時孟子御會被　仰出、無名之指ゟ尺寸之膚之章迄被為済候

一、明日御飛脚立ニ付寒見舞之諸状仕出、膝下ニ呈、并家内江ハ別段之事、飛八丈御下着上ケ申候

近藤〔淡泉〕先生　同市之允　池邊謙助　山口仁九郎　太田庄助　簗瀬騏兵衛　中村加善　栃原五郎助　井口呈助　浅山左納　平川駿太列三人　池松大八　河部仙吾　澤村宮門　小堀次郎助留守共々　上村千右衛門　大野孫次郎　本田周平　大城七郎兵衛　水足七之助　町野玄粛　水津熊太郎　松原傳左衛門　下津久馬殿

註

① 市之允…近藤市之允。父は時習館教授、近藤淡泉二百石、大組附。（『熊本藩侍帳集成』、五七七頁）

② 山口仁九郎…諱は東禧、字は子篤、仁九郎と称し、東流または壺隠と号す。百五十石。時習館助教となる。安政六年七月十三日没す。享年七十七。（『肥後人名辞書』）

② 太田庄助…学校御奉行触、百五十石、時習館訓導。（『熊本藩侍帳集成』、四三〇頁）

③ 栃原五郎助…名は矯、字は伯立、五郎助と称し、漆潭と号す。菊池郡の人。時習館訓導となり、中小姓に班される。嘉永二年九月没す。享年五十二。（『肥後人名辞書』）

③ 井口呈助…名は徳、字は子馨、通称呈吉、初呈助、岱陽・左拳陳人と号す。二百五十石。時習館助教より奉行兼用人となり、後に少参事に転じる。明治八年十一月二十三日没す。享年五十七。（『肥後人名辞書』）

④ 浅山左納…二百五十石、御側御取次。（『熊本藩侍帳集成』、五七七頁）

⑤ 河部仙吾…名は素、字は子緝、仙吾と称す。郡代、作事目付及び時習館訓導を勤める。百石。弘化三年二月九日没す。享年七十四。（『肥後人名辞書』）

⑥ 小堀次郎助…二百五十石、八代御城付。（『熊本藩侍帳集成』、五八四頁）

⑦ 大野孫次郎…二百石。（『熊本藩侍帳集成』、五四四頁）

⑧ 水足七郎助…有吉組、五百石。（『熊本藩侍帳集成』、四二六頁）

⑨ 下津久馬…名は通大、通称久馬、隠居して休也と称す。号は蕉雨。千石。奉行及び番頭を経て大奉行となる。維新の際京摂ノ間に奔走する。享年七十六。（『肥後人名辞書』）

廿九日　晴寒

一、終日閑居構文、夜分新美一左衛門御小屋江参候

卅日　同

一、村上久太郎隣御小屋江引移、門岡員左衛門、秋吉才助参り候

一、御夜讀、並之通

十二月朔日　晴

一、御會不時ニ被仰出、人爵天爵之章迄被為済候

一、四ツ過ゟ安井仲平ニ参り、策論批評相頼申候、夜五ツ前帰、當夜清成八十郎先祖祭ニ付案内有之、直ニ罷越申候

一、今日、村上久太郎御近習當分被　仰付候

二日　晴

一、清光院　御参拝ニ付御休會、午後

御詩會並之通、雪夜讀書、晴陽楼即事上申候、二首被為遊候

一、御夜讀、並之通

註

① 清光院…臨済宗大徳寺派。熊本藩菩提寺、東海寺の塔頭（十七寺）の一寺。現在の東京都品川区南品川四丁目。

三日　晴

一、世子所々御回勤、夫ゟ龍ノ口江被為入候而夜分御帰座ニ付、昼夜御休会

一、上村彦次郎来候也、夜分佐久間角助、村上久太郎来話

註

① 上村彦次郎…名は邁、字は伯安、彦次郎と称し、戇窩と号す。百石。世子侍読を勤めるも辞め、後に時習館訓導となる。明治元年四月十六日没す。享年五十一。（『肥後人名辞書』）

四日　晴、午後陰、夜雨

一、御會、粱膏文繡之章被為済候

一、久留米屋敷江参り、野崎平八、村上守太郎對面

一、御夜讀、並之通

註

① 村上守太郎…江戸時代後期の儒者。文政二年生まれ。筑後久留米藩士。昌平黌にまなび、水戸の会沢正志斎に入門。藩主有馬頼永の藩政改革をたすけ、のち参政となった。嘉永三年六月十四日藩政上の対立からか、おなじく参政の馬淵直道をおそって刺殺された。享年三十二。字は士精。通称は守太郎。著作に「水戸見聞録」など。（『日本人名大辞典』）

五日

一、若殿様、真田侯御値、其外所々御回勤ニ付御休会

一、去ル朔日、安息軒（安井）ニ頼置候策論之文、上村彦次郎持帰候而遠（遠山）三左衛門ゟ達

一、夜分仲平書帖、同藩森國太郎持参、阿萬豊蔵ゟ傳言之趣も有之、右藩江島小弥太病氣、深水宗古ニ為見申度望ニ付、宗古ニ談合申候而、明日辰ノ口罷越、序ニ見舞可申との事ニ候

一、夜会今日終業ニ付、清成方江酒を送申候

六日　晴

一、講釈並之通被　仰付、五子之歌済申候

一、御夜讀並之通被遊候

七日　晴

一、御嚙子拝見被仰付候、阿萬豊蔵、小弥太病用ニ付深水江参り立寄、名和桂之助参候事

一、御夜會、御休

八日　陰

一、御会、告子上篇畢

一、御夜讀、並之通

九日　晴、後陰、暮夕雪

一、遠山三左衛門同道、一斎〔佐藤〕翁江歓ニ参申候

一、佐久間角助、村上久太郎、渡部直之允、林家入門被　仰付候ニ付、今日川田八之助江申込候

一、寒中歳暮林家江御付届之儀、為承合長州様御屋敷江罷越、小倉尚蔵江對談仕候

一、辰ノ口所々寒見舞、暮ニ而引取、途中夕雪ニ逢申候

註

① 小倉尚蔵…小倉遜斎（一八〇五～七八）。名は実敏、字は公修、号は遜斎、通称尚蔵。江戸後期明治初期の漢学者。文政七年明倫館助教、天保八年藩主毛利敬親の侍読となった。天保十二年江戸桜田藩邸内に有備館が創設されると、その学制や釈奠の式を定めその基礎を固めた。弘化二年江戸に扈従した時は御蔵番『国史論纂』『民政要編』の上梓御用掛を勤めた。安政三年明倫館学頭・祭酒となった。明治十一年没す。享年七十四。（『江戸文人辞典』）

十日　晴

一、御會、食禮之章被為済候

一、御夜讀、並之通

十一日　晴

一、御會、曹交問小弁之詩二章被為済候

一、夕方論語會仕候

一、先月仲旬之御飛脚着、家書平安、弟弘〔木下真弘〕詩文を贈

一、先達而差上置候御稿巻批點被　仰付、関原之詩田代雄次郎甲、御前乙科御取被遊、試騎之詩も御同様、紀事ハ　御前甲科、島田忠次郎乙を取申候、次之御題、贈俠者醉存放歌紀源君食麥飯事、翌十二日上申候

十二日　晴

一、御會、宋涇之楚孟子居鄒二章被為済候

一、御詩會並之通、尤於鴈御間被遊候、画雀雪中浮墨田江、一首七律被遊候

一、先年　御在國之節、栃原五郎助差添時習館詩文章世話仕候様被仰付置候儀、白金詰被　仰付候而ハ、休息又ハ萬一新御屋形御供下仕候節ハ如何程ニ相心得可申哉之儀、先達高橋弥四郎を頼、機密問合申候處、此節付紙ニ而申越本文之儀、休息仕候節ハ世話ニ及不申、若殿様御供ニ而下候節ハ本文之通世話仕候様との旨ニ候

一、明日御飛脚立ニ付、仕出左之通

一、桑満伯順　渋江忠多　野々口金左衛門　富岡三郎左衛門　奥村四郎作　平塚孫四郎　江島文左衛門　国友式右衛門

註

① 桑満伯順…名は伯順、字は子義、負郭と号す。菊池の人で、侍医から後に再春館師役となる。百石。安政四年八月没す。（『肥後人名辞書』）

② 渋江忠太…名は公豪、字は徳翼、通称は忠太。渋江松石の第二子。家塾梅花書屋を設け後進を指導する。弘化三年七月三十一日没す。享年五十九。（『肥後人名辞書』）

十三日　晴

一、佐久間角助列林家入門之儀ニ付、明日罷越御定承合候筈之處、川田八之助薩摩御屋敷江罷越候由ニ而立寄、弥来ル十六日林家御支無之、明日参り候ニ及不申段申聞候

一、先々月比、伊達大膳太夫様ゟ太守様江於　御城御出會之時分、休兵久矣而國益困と申を、時務策ニ諸生江文被仰付被下候様御頼ニ相成候末、桂之助追々取遣仕、来ル十五日　御登城、御用ニも被為在候半と奉存、今日相認、遠山、上村分共ニ都合三通、翌朝名和桂之助手元江遣申候事

十四日　晴

一、風邪氣味ニ付、今日御會村上久太郎ゟ上ル、淳于髡一章被為済候

一、清原小左衛門、岩間百助参ル

一、御夜讀も御断申上候

註

① 岩間百助…百石。（『細川家家臣略系譜』）

十五日　晴

一、無事

十六日　晴

一、講釈並之通被　仰付、胤征二章上ケ申候

一、御人数揃

太守様も被為入、

嗣君御出馬、夜分御休讀

十七日　雪深二尺

一、文社、渡部魯助、税田正蔵、竹居清記、上村彦次郎来、雪降ニ付通行難義、夜分止宿

十八日　晴

一、門員左衛門同道、札指旧橋迄文社之諸友を送り

一、御夜讀罷出候

十九日　晴

一、夜分御會被　仰出、五覇三王之章被為済候

廿日　晴

一、孟子　御會被　仰出、魯使慎子為将軍以下二章被為済候、今日限諸　御稽古被為遊御休候事、例年之通

廿一日　雨

一、夜分於司馬助方、言行録会業、當日終席

一、先月廿五日立之御飛脚着、家書平安

一、片岡忠左衛門實母病死之段申来ル

廿二日　晴

一、臨時御会被　仰出、白圭二章被為済候

一、御次　御内證拝領有之、九曜御役附黒羽二重御小袖壱ツ拝領仕候

一、加々山権内、国枝喜弥太着

一、夜分御詩会被　仰出、於　御居間、歳除覧旧稿雪中試騎上ケ申候

廿三日　晴

一、清成方同道、林家江参り、内田聞多江逢、大学頭様御出懸合之處、年迫候付来春ニ御断ニ相成申候、川田八之助江も行合せ申候事

一、夫々龍口江参り、夜分ニ罷帰申候

廿四日　晴

一、臨時　御會被仰出、君子不亮々楽正子好善之章迄被為済候

一、夜分　御居間ニ而　御詩會、離人談冨士游歳晩即事二題上申候、御會後御酒頂戴、御酌をも被下候事

廿五日　晴

一、臨時御會被仰出、三去三就之章々次一節被為済候

廿六日　晴

一、不時講釈被　仰付、胤征相済申候

廿七日　雪

一、先日差上置候　御詩巻出来、批點被　仰付候

一、夜分吉村直助来話

一、今日御飛脚立ニ付家書仕出、弥四郎〔高橋〕江歳暮為遣候

一、荻角兵衛頼之通鑑綱目二箱、水津名當ニメ御飛脚ニ仕出申候

廿八日　晴

嗣君御登城

一、入江傳右衛門方、先役御郡代之節、阿蘇、南郷ハ季候も悪敷、諸作不熟之處、成熟之仕合厚心配いたし候趣ニ付、四時分被為召候而、御役附御上下一具、白銀二枚被下置候ニ而被　仰渡

廿九日　晴

一、所々付届左之通

一、酒壱升　○両角権助

一、酒弐升肴　○高橋弥四郎

一、壱両　砂糖一箱　○深水宗古

一、弐朱　砂糖一箱　○福間恵迪
一、酒三升　本田久次
一、同壱升　○御次坊主
一、砂糖一箱　○片岡忠左衛門
一、酒壱升　明石常次
一、同壱升　芳澤金吾
一、南鐐一片　○惣手傳中
一、三百文　○下遣中
一、砂糖一箱　本間達之助
一、酒三升　片岡列催合御附物書江

註
① 福間恵迪…名は清澄、英安の長子。業を継ぎ侍医となる。嘉永三年四月十四日没す。享年七十四。（『肥後人名辞書』）

天保十三年　寅正月

朔旦　晴

一、五ツ半時、揃熨斗目長袴ニ而御禮御熨斗頂戴

二日　晴

一、衣服同様ニ而御寺参拝

三日　晴

一、朔日龍口御禮之残、今日被為受候ニ付、服同様出仕仕候、御門明ゟ罷出、六ツ半比龍口江着仕候處、今日所々　御回勤被為有候ニ而、御刻限ニ差懸り候ニ付、御次分ハ謁而相済候事

一、澤村宮門頼之羅念庵写本、金花堂ゟ受取申候

註
① 羅念庵…羅洪先（一五〇四～六四）。明代の儒学者。吉水（江西省）の人。字は達夫、号は念庵。王陽明に私淑した。

四日　晴

一、在寓仕候處、高橋弥四郎、金子清八宅ゟ呼ニ遣、夜分迄相滞、門岡員左衛門一同罷帰申候

五日　晴

一、在舎

六日　雨

七日　雨

一、今日例林家拝年、　御門明ゟ罷越、暮方帰申候、帰途永山十兵衛を尋申候

八日　朝晴、夕雨

○

一、星合雲八年酒仕候由而招キ申候

一、加々山権内林家入門被　仰付候

九日　雨

○

一、昨八日不時御會　被　仰出、告子下篇被為済、始而之御會ニ付御酒被下候

十日　晴

一、林家江罷越、加々山権内入門申込、来ル十五日角助〔佐久間〕列一同支無御坐候由

一、澤三郎、古賀先生〔小太郎、侗庵〕、羽倉縣令〔外記、簡堂〕年礼回り、米庵江書四枚頼ニ申候、代金弐分遣申候、帰り懸木挽丁愛宕下回勤

註

① 米庵…市河米庵（一七七九～一八五八）。名は三亥、字は孔陽・小春、号は米庵・小山林堂・金羽山人。百筆斎・楽斎・亦顛道人、通称は小左衛門。江戸後期の漢学者・書家。江戸日本橋桶町に生まれる。父は市河寛斎。文政四年金沢藩が禄三百石の待遇で世子の師とした。安政五年七月十八日没す。享年八十。（『江戸文人辞典』）

十一日　晴

一、御鏡餅頂戴

十二日　陰、小雨

一、年始状認左之通

近藤英助　池邊謙助　近藤市之允　山口仁九郎　太田庄助　簗瀬騏兵衛　中村加善

井口呈助　河部仙吾　浅山佐納　大城多十郎　柏木文右衛門

福田角三郎　平川駿太

草野永太郎　加藤平之允　池松大八　大野孫次郎　小堀次郎助

上村千左衛門

宇野市郎右衛門　野々口金左衛門　冨岡三郎左衛門　久野長次郎

齋藤三郎　奥村四郎作　横井儀右衛門　永田傳九郎　松村十之允　山崎甚之助

大里隼之助　蒲池太郎八　下河邊甚右衛門　下津久馬　佐々布仙九郎　鎌田左一郎

荻角兵衛　築山又兵衛　渡部十左衛門　愛教四郎次　澤村宮門

水津熊太郎

加来元恭　北野際左衛門　平塚孫四郎　井上久助　大城太郎衛門　町の玄粛

沼川敬内　出田十郎兵衛　国友式右衛門　片山喜三郎　水足七郎助　本田周平

松原傳左衛門右（福富亀之允 三村傳之助）　古庄次郎八　高木甚之助（渋江安宅 同 勝真）　同　忠多

（木下勘右衛門 同 新右衛門）　（筑紫董 同 一馬）　（平山勘左衛門父子 西太十郎）　（川口益左衛門 近所傳吾）

城の兄弟

（徳永礼八 山田付）　桑満伯順　栃原五郎助　永沼十郎助

註

① 宇野市郎右衛門…名は輔崇、通称市郎右衛門、隠居後一葦と称する。幼時より時習館に入り、文武芸を修める。禄二百五十石で、郡代、穿鑿頭、掃除頭、作事頭、鉄砲頭、奉行近侍等を歴任する。明治十八年五月没す。享年八十三。（『肥後人名辞書』）

② 野々口金左衛門…学校方御奉行触、二百五十石、時習館句読師。（『熊本藩侍帳集成』、四六四頁）

③ 冨岡三郎左衛門…二百石、学校御目附御使番列。（『熊本藩侍帳集成』、五七六頁）

④ 久野長次郎…旧知二百石。（『熊本藩侍帳集成』、四六四頁）

⑤ 蒲池太郎八…二百石、御番方組脇。（『熊本藩侍帳集成』、五七七頁）

⑥ 築山又兵衛…遠坂関内組、百石。（『熊本藩侍帳集成』、四三八頁）

⑦ 愛教四郎次…百石、御櫓番。（『熊本藩侍帳集成』、三五七頁）

⑧ 平塚孫四郎…坂崎忠左衛門組、百五十石。（『熊本藩侍帳集成』、四三三頁）

⑨ 水足七郎助…有吉組、五百石。（『熊本藩侍帳集成』、四二六頁）

⑩ 高木甚之助…名は豊久、家世々音律を以て仕える。また武芸に長じ、教えを受けた者は三百八十人程に及んだ。嘉永六年一月没す。享年六十三。（『肥後人名辞書』）

⑪ 渋江安宅…名は公隆、字は孟吉、通称は安宅、龍淵と号す。渋江松石の長子で、郡の文学指南となる。経学や書法の指導を受けた者多数。嘉永五年一月十七日没す。享年七十五。（『肥後人名辞書』）

⑫ 平山勘左衛門…御留守居御中小姓頭之触組、三人扶持。（『熊本藩侍帳集成』、四五〇頁）

十三日　雨

一、御會被　仰出、盡心首三節被為済候、御會業等之御日柄、御謡御稽古を以被差止候而ハ如何と申儀、清成方江申問候處、御文武之外ニ御餘日ハ無御坐事ニ付、時ニより候而ハ左様ニも参申間敷との事ニ候、其末少し異見違之話ニ成申候

十四日　雨

一、昼之内被召出、此間差出候策論被遊御讀、上村彦次郎、自身両人分被為済、存之外被遊御通候

一、夕方澤村方江用事ニ付参り候

一、御飛脚来ル十七日ニ差延候

十五日　雨

一、御登城、並居服紗半袴

十六日　晴

一、佐久間角助、村上久太郎、加々山権内、渡部直之允林家入門ニ付、為紹介罷越、無異儀相済申候

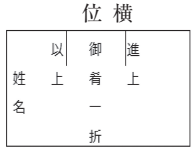
林家入門式

一、名前を以先員長江申込、始末員長世話仕候

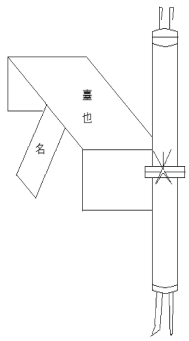
進物

一、金子弐百匹　大学様江

奉書紙包ニメ横二寸竪三寸五分位



奉書紙半折



小奉書包片木付

一、同百疋宛　御員長御家老

一、同弐朱宛　御用人四人

右同様　前原運平

内田聞多

西尻喜左衛門

山田隼太

一、去十二月十五日立之御飛脚着、家書平安、尊書并小太郎文章、家内手織之袷参ル

一、右田喜十郎米拾俵被下置段知せ参り

一、田中典儀、元田市太郎、平川駿太、加藤平之允、友成津内、遠藤廉太郎、大野孫次郎、道家角左衛門寒中之状参ル

一、大城太郎衛門、筑山又兵衛、大城多十郎、小堀次郎助、沼川敬内、工藤幸記、元田傳之丞、松井武、井村八十左衛門書状、追々ニ届来、齋藤三郎、中村加善、宇の市郎右衛門

十七日　晴

一、今日初而書経講釈被仰付、湯誓十篇上申候

十八日

一、孟子御會被　仰出、萬物皆備之章ゟ耻之於人大矣之章迄被為済候

一、夜分蒙求御會被仰出候

註

① 右田喜十郎…名は直一、通称喜十郎、城野弥三次（静軒）の弟。天保年間、藩の命によって植物を興して、米十苞給与される。明治十年二月没す。享年七十五。（『肥後人名辞書』）

十八日　晴

一、書經講釈被仰付、湯誓一篇上申候

十九日　晴

一、孟子御會被仰出、古之賢王好善章ゟ宋句践迄二章被為済候

一、夕方安井仲平来ル

一、夜分田代方ニ而、遠山、加々山、芳澤、深水橘齋、主人、自身

詩会致候

廿日　晴

孟子御會讀被　仰出、以佚道使民迄三章被為済候

一、夜分被　召、明日林大学頭様御出ニ付、論語　御下見御相手被
仰付候

廿一日　晴

林大学頭様四ツ前御出ニ相成、表御廣間江御坐着ニ相成候上罷出、
佐久間列も同様之處御案内ニ相成、
若殿様御附役詰所向御杉戸際迄　御迎ニ相成、暫御對話之上御見臺
御文臺出シ、論語初三章被成　御講釈、相済候上又々暫御話ニ而表
御廣間江御引取、御送り同御杉戸迄ニ而大学頭様御湯漬御仕舞之上
御引取ニ相成、角助列一同御玄関通之御間迄御送申出候

廿二日　晴

一、孟子　御會、覇者之民、仁言二章被為済候、宇和嶋世子之策問
承、半切書写入　御覧申候

一、今日迄ハ御詩會ハ不被遊候

註
① 宇和嶋世子…伊達宗城（一八一八～九二）。

廿三日　晴、半陰、朝小雨

一、孟子　御會、良知良能以下二章被為済候

一、夜分入江方江参り申候

廿四日　晴

一、孟子　御會、無為其所不為以下二章被為済候

一、御會後ゟ渡部直之允大学終日會仕候

一、八ツ比羽倉縣令御出ニ相成、去ル十五日御納戸頭ニ御轉役被成
候由、箱入之鴨味噌鳧味噌二器御為持ニ而被下候

廿五日　陰、暮雨

一、近思録會、遠山宅ニ而始ル

廿六日　陰、雨

一、講釈、仲虺之誥用爽其師迄上ケ申候

一、清成方論語會

廿七日　小雨、風

一、孟子御會、君子有三楽章、次章被為済候

一、夜分蒙求　御會被遊候

一、今日雇立ニ付平安を申遣候

廿八日　晴

一、孟子御會、伯夷避紂ゟ次章迄被為済候

廿九日　陰

卅日　陰

一、孟子御會、雞鳴而起之章迄被為済

一、夕方片岡列同道、　御寺参拝

一、旧冬十二月廿八日立之御飛脚着、家書平安

永屋猪兵衛　太田庄助　近藤市之允

右三ヶ所書状来ル

松村十之允　国友式右衛門　田中弥兵衛　井村弥十衛門

和久田加兵衛　井口呈助　小堀次郎助　稲津栄之助

右同書状来ル

二月朔日　陰、雨

一、近思録、芳澤宅ニ而會業

一、言行録、入江御小屋ニ而會業

二日　晴

一、渡部直之允大学對讀、夜分ニ懸ケ卒業

三日　晴

一、孟子御會、揚子為我章より次章迄被為済

一、渡部直之允御小屋江参り

一、夜分蒙求御會讀

四日　雨

一、孟子御會、柳下恵章ゟ不素餐章迄被為済

一、今日御飛脚立申候付平安申越、稲津栄之助返書、城野弥三次、右田喜十郎返書仕出ス

五日　晴夕陰夜風

一、孟子御會、桃應問之章迄被為済候

一、渡部直之允休息ニ付中村健助、田中弥兵衛、国友式右衛門、隈部彦四郎、松井武、元田傳之丞、元田市太郎、和久田加兵衛、永屋猪兵衛、友成津内、田中典儀、近藤市之允、道家角左衛門江書状仕出

一、近思録芳澤宅ニ而會業

一、論語會、夜分清成御小屋ニ而相勤

六日　朝陰風

一、講釈並之通、民之戴商惟其舊哉ニ至ル

一、孟子御會、形色天性也之章迄被為済候

七日　晴

一、孟子御會、君子之教人章迄被為済候

一、渡部直之允、船津三左衛門、芳澤金吾同道、休息出立ニ付、蒲田迄送り

八日　晴

一、孟子　御會、滕更之在門迄被為済候

一、安井仲平来ル

九日　晴

一、緒方喜傳、門岡忠蔵休息出立ニ付御門迄送り

一、嗣君大崎江御出

一、夜分言行録會業、清成方ニ而有之候

十日　晴

一、孟子御會、盡心上篇被為済候

一、加々山権内、村上久太郎同道、羽澤江参り、夜分被為　召候ニ而明後十二日林公御招ニ付、論語御下見被仰付候

十一日　晴

一、嗣君大崎御出

一、論語會、手前御小屋ニ而致候

十二日　晴

一、大学頭様御出之筈之處、指懸御　登城之由ニ而御断、来ル十六日可有御出も申来候（盡信書不如無書）

一、孟子　御會、進銳者退退迄被為済候

十三日　陰

一、孟子御會殺人親之章ニ至ル

十四日　晴、夜陰、雨

一、孟子御會、無政事則財用不足迄被為済候（殺人親之章）

一、論語會、芳澤宅ニ而夜分ニ仕候

十五日　雨

一、去月十二日仕出之家書相達

齋藤三郎　上村千左衛門　永田傳九郎　宇野市郎右衛門　小堀次郎助　本田周平

出田十郎兵衛　稲津栄之助　渋江忠多品済　近藤市之允　沼川敬内　大塚栄之允

国友式右衛門　福島亀之允　中村加善　松村十之允　大城太郎右衛門　同多十郎

筑山又兵衛　水津熊太郎　平塚孫四郎

右年首状来ル

一、孟子御會、無政事則財用不足迄被為済候

十六日　晴、朝風

一、林公御腫物ニ而尚又御断被仰遣候

一、嗣君蒲田江御歩游

十七日　晴

一、文社、安井仲平宅江打寄申候
古畑文蔵、渡部魯助、山内和十郎、竹居清記、上村彦次郎
後會課題
渡部氏族譜序
海嘯説
某氏書画帖跋
菊池武光畫像記

十八日　陰雨

一、孟御會被　仰出、聖人百世之師ニ至
一、司馬藤太郎を尋、夜分帰り
一、今日御飛脚立候ニ付、平安申遣

十九日　晴

一、孟子御會、山径之蹊間ニ至ル
一、嗣君大崎御出
一、詩會定日ニ候へども、遠山子を失、加々山御供ニ而無人ニ付見合せ候

廿日　晴

一、孟子御會被仰出、山径之蹊間ニ至ル（口之於昧ニ至ル）
一、午後辛川、入江、佐久間列同道、新富士當り迄游山仕候

廿一日　晴

一、遠山三左衛門講釈被仰付、孟子、仁別栄之章ヲ終ル
一、林大学頭様、今日御出之筈之處、未タ御登城無御坐、御断被仰進候
一、夜分言行録、辛川方

廿二日　朝陰、昼晴

一、嗣君大崎御出、終日無事

廿三日　朝陰、昼雨

一、清成八十郎方より噂ニ付林家江罷越、御内分痛所御見舞之御口上相述、且明日御出之儀相伺候處、御登城跡ニ候へども、御用人ゟ明日可有御出段、及返答候、昨年内文稿差出候様川田八之助江林公ゟ被仰付候段、八之助噂仕候ニ付、今日文五篇詩少々認差出申候
一、龍口江参り候處、市郎兵衛殿ゟ御逢度段、追々弥四郎江噂有之居候ニ付罷越、暮方迄罷在候
一、溝口蔵人殿着ニ付、歓ニ衆礼を以罷出候
註
① 溝口蔵人…（一八〇九～一八七二）大奉行、のち中老。（『肥後細川藩・拾遺』）

廿四日　晴

一、大学頭様四ツ過御出、御講釈、不重則不威之章迄被為済候
一、昼後村上久太郎、門岡員左衛門同道、出浮申候

廿五日　朝陰、昼晴
一、今日御雇立申候由ニ付、平安仕出申候
一、孟子御會、與楊墨辯者ニ至ル
一、今月　御課題
停市中行家除其征金使客商随便賣放亦仁政之一端、孟子梁恵王下篇中似嘗言之敢詞何語
再興仰高門日講至庶人得入聴、又以按摩金彌、箍工寅五郎等能事其父母賜銀米褒奨、亦盛事也、孟子梁恵王上篇中何語以當之
送人游琵琶湖　七律
贈書家　各體
一、午後近思録、芳澤、門岡両人ニ而、御小屋ニ而讀

廿六日　朝陰
一、今日ゟ定日之講釈被　仰付、以後節々不被及達段御附中ゟ申来
一、講釈、仲虺之誥畢
一、鎌田左一郎、水足七郎助より之状、宮村新兵衛上りニ持参之由ニ而、平野方ゟ届来候
一、司馬藤太郎列同道、廣原出浮
註
①　廣原…広尾原。渋谷・豊沢にまたがる原野。別名で樋籠、広野と呼ばれた。（『江戸名所図絵』）
②　鎌田左一郎…時習館訓導、鎌田答次の長子。芦北郡郡代。御目付二百石。（『肥後細川藩・拾遺』）

廿七日　雨
一、孟子　御會、不忍不為之章ニ至ル
一、論語會郷黨篇畢ル

廿八日　陰
一、正月廿七日立之御飛脚着、尊書、家書平安
山口仁九郎　簗瀬騏兵衛　太田庄助　水津熊太郎　平川駿太
加藤平之允
山田守敬　井村八十右衛門　村上久之允　奥村四郎作　野々口金左衛門
柏木文右衛門　荻角兵衛　工藤幸記　井口呈助　浅山左納
道家角左衛門
伊津野準作　長沼十郎助
右書状来ル
註
①　村上久之允…続繁弥組、百石。（『熊本藩侍帳集成』、四三七頁）
②　伊津野準作…御次物頭御中小姓根取、御近習御次御支配頭之支配、十五石五人扶持。（『熊本藩侍帳集成』、四四六頁）

廿九日　陰

一、孟子、説大人之章ニ至ル

卅日　晴

一、孟子、闇然媚於世也者郷愿也ニ至ル

一、明日御飛脚立ニ付、簗瀬騏兵衛旧冬御小袖拝領、沼川永喜櫨方御役人當分、伊津野謙太郎金子拝領、長沼十郎助着、歓等返事旁仕出申候、其外山田守敬御目見医師被仰付も同様仕出申候

一、村上久之允返事仕出

一、北野際右衛門當三月中出立、江戸詰被仰付候段、同人状参候

三月朔日　晴

孟子　御會被　仰出、今日迄ニ相済申候、跡御會論語ニ被遊旨御直ニ奉伺候

二日　晴

一、今日ゟ論語　御會御始、巧言令色之章迄被為済候

三日　晴

嗣君　御登　城、並居御禮謁

四日　晴

一、高橋弥四郎　召ニ而数年相勤候ニ付、御擬作高百石被下置、御知行取格ニ被仰付候、村上久太郎同様ニ而新御屋形御近習本役被仰付候

一、右高橋江参り、金子清八同道、九ツ過罷帰申候

一、林大学頭様御日取、西尾喜左衛門江懸合申候處、御他行内ニ付暮方龍口ゟ書中を以相伺候へハ、来ル十二日如例朝より御出可有御坐段申来候

五日　晴

一、司馬藤太郎江罷越、清成八十郎頼ニ付関善左衛門申入之儀相談仕申候

一、塩谷甲蔵参、川西三助参州より之壱封披見致候處、学問未熟酒失有之、心ニ愧申候ニ付刺腹仕候、交情之誼ニ候へハ跡之儀宜敷相頼申段、仲平、甲蔵、大一（古賀）郎、手前連名ニ而日附ハ無之候得共、去ル二月十九日之事之由、同廿日事切レ申候、別ニ詩一首添

霸愁日々伴孤斟、剛知工夫動愧心、讀書萬巻疵百出、奈何君寵母思深

題未報酒債如山屋壁

甲蔵同道、川西留守江参候處、中井隆益も参り居、参州ニ而取扱之者抔之書状、其外三助ゟ的之進ニ遣候手紙等取合吟味仕候處、別之子細ニ無之と相見へ申候事、未タ切不申已然ニ別ニ申置候儀ハ無之哉と申候へハ、母之事流石ハ申候由、又追々之過失君侯之御目鑑を違候段第一之恐愧ニ而此次第と申事、森何某ニ申候由、君侯ゟも御側使とも被下、御厚キ様子ニ相見へ申候

一、昨年甲蔵一同心配仕候金子之儀、三助ケ様ニ相成候上ハ家内跡

目ゟ已後心配ニ及不申段、甲蔵江申聞候
一、今日近思録之處、前条ニ付相断申候
一、夜分清成方江参り、入江傳左衛門、久保正助同話
一、今日
嗣君石小田江被為入、
君上ニも被為入候由、夜四ツ過此御許
御帰座
註
① 中井隆益…江戸後期の漢学者。三河吉田藩（松平氏七万石）に仕える。自刃した川西三助の兄。（『江戸文人辞典』）

六日　晴
一、ほふれん院様奥平様御所様之御續キ御出之由、
君上ニも當御屋敷ニ被為入候、右ニ付今日定日之講釈御延引被
仰出候
一昨日四日龍口江参候留守ニ、永山十兵衛、井内左馬之允、村上
守太郎参候由、名前相見へ候
一、門岡員左衛門同道、高輪筋歩行、大佛寺中傀儡師見物仕候

七日　晴
一、御會、弟子入則孝之章ニ至ル
一、四ツ半過赤木明神下より出火、折節風強ニ而北手夥敷類焼、水
道丁も越申候由、仲平宅無心元候間罷越申候處、無難ニ而羽皋諸
生参り居申候
一、御稽古御日課通被遊旨被
仰出候段、御附役中ゟ紙面達
一、宗門差出、一両日中差出候様龍ノ口御近習方物書ゟ申来ル
註
① 赤木明神…赤城神社。現在の東京都新宿区赤城元町に位置する。牛込台北角の台地上に位置する。近世には赤城明神とよばれ、別当は等覚寺が勤めていた。（『日本歴史地名大系』）
② 水道丁…水道町。現在の東京都新宿区水道町。江戸川に架かる石切橋を渡って南下する通りの西側を占める片側町で、里俗に赤城下片町ともいう。北は江戸川で画され、西は小日向東古川町・牛込改代町、南は牛込築地片町、東は武家地。（『日本歴史地名大系』）
③ 羽皋…羽澤。松崎慊堂塾の所在地。

八日　雨、風
一、名和桂之助江講釈被　仰付、尊賢使能一章四ツ比相済候
一、御奉公附桂之助江頼ニ遣候

九日　晴
一、石小田　御出

十日　晴
一、御會、慎終進遠章ニ至ル
一、芳澤宅ニ而灸治後、同道廣尾原ニ歩行

一、御夜讀出勤仕候
一、二月十三日立之御飛脚着、家書平安
一、古庄次郎八〆之書状、八太〆相達
一、今日角次を遣申し、米庵江頼置候書四枚受取、澤村宮門〆佐藤家江之一翰相達
一、小堀次郎助書状、村上久太郎〆相達

註
① 米庵…市河米庵（一七七九～一八五八）。江戸時代後期の書家。安永八年九月六日、寛斎の子として江戸京橋桶町に生まれた。名は三亥、字は孔陽または小春、米庵と号し、別号に楽斎・顛道人・金洞山人・半千筆斎・百筆斎・小山林堂と称した。寛政十一年、書塾小山林堂を開き書の教授を始めた。（『国史大辞典』）

十一日　晴
一、御會、至禮之用和為貴章
一、来ル十三日、十四日林家御支無御坐候由申来候得共、右両日ハ御支ニ付十七日、廿日を以懸合候様野村方ニ申聞候付罷越候處、右十七日ハ林家御宅會定日、廿日ハ御稽古所定日ニ而何レも御支ニ付、尚別日を以伺候様内田聞多紙面遣候事
一、溝口蔵人方江参り、夜分帰り、門岡年廻仕候ニ付直ニ罷越申候
一、松原傳左衛門着ニ付、歓ニ参申候、家書并煙草届ニ相成申候

十二日　晴、午後雷聲
一、御會、学而章終
一、御詩會、當春始而被遊
　春臺望
　書書齋壁
右加々山上ル、一首律を被遊候
一、夜分　御軍書罷出候

十三日　晴
一、石小田　御出
一、明日御飛脚立候ニ付、宿元并井上久助、沼川敬内、渡部直之允、船津三右衛門、志方小左衛門、筑紫一馬、小堀次郎介紙面仕出

十四日　晴
一、御會、道之以政之章ニ至ル
一、夜分蒙求被為遊御讀候

十五日　晴
一、近思録會、於手前致候事
一、本間彦八　御目見被　仰付候ニ付、夜分祝儀ニ参申候

十六日　晴
一、所々御出ニ付、講釈　御延引被仰出候

十七日　陰

一、御會、孟懿子問孝之章ニ至ル

一、文社手前ニ打寄、安井仲平、武居清記、田中龍蔵、山内和十郎、後題、送武居某甫帰福嶌序

一、今晩　御夜會、御近習ゟ上ケ申候

十八日　雨

一、秋葉社御祭礼ニ付御休會、夜分御同前

十九日　晴

一、村上久太郎、吉村直助、門岡員左衛門同道出浮

（以上三巻終）